

「命の食物」

詩篇 第111篇1節～10節
マタイによる福音書 第6章 11節

説教 岡村 恒 牧師

「私たちの日ごとの食物を、今日もお与え下さい」主イエス・キリストがお教え下さった、祈りの一節です。

祈りとは、神との対話です。神が私たちに目をとめ、心を傾けて、語りかけて下さる、そこから祈りが始まります。その語りかけを聞き取って初めて、私たちは口を開き、神に心を開いて祈り始めます。主イエスは、弟子たちや罪人たちと、しばしば食事をなさいました。一緒に目に見える糧を口にしながら、神の国の糧の話をなさいました。神の御心を祈り求めた者が、今日一日を生きるためになくしてはならないものを祈り求める時、それは単に口から入るパンでなく、まことの命の糧を意味していました。

日ごとの糧と聞くとすぐ思い出されるのは、出エジプト記の「マナ」です。神様がユダヤ人を奴隷の地エジプトから導き出した後、人々は荒野をさまよいはじめました。食料が尽き、人々はモーセに「あなたがたは、われわれをこの荒野に導き出して、全会衆を餓死させようとしている」(出エジプト記 第16章3節)と不平を言いました。本当に苦しい奴隷の状態から解放された直後、神が人々を救い出された直後、「食べ物がない」ことに絶望して、エジプトにいた方がましだったと言い始めるのが、私たちの先輩、信仰者の実態です。主はモーセに言われました。「見よ、わたしはあなたがたのために、天からパンを降らせよう」(II 4節)。朝テントを出ると、マナが与えられており、それを集めて食べて生きる。それがユダヤ人に与えられた40年の荒野の旅でした。神は、毎朝その日必要な分だけ降らせるといふ仕方で、人が何によって生きるかを教えられたのです。

主イエスがサタンに「もしあなたが神の子であるなら、これらの石がパンになるように命じてごらん下さい」(マタイによる福音書 第4章3節)と誘惑されたとき、主イエスは聖書を引用して「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである」(II 4節)と反論して撃退されました。一日一日主がお与え下さる糧を受けて生きる、これが信仰者を生かす神のなさり方だと聖書は教えます。命の糧を頂けたら、私たちは今日も、神の命を味わいながら豊かに生きる。これが命の糧を頂きながら生きる者の姿です。

水がなくなったとき、神がモーセに命じて杖

で岩を叩かせると、水がほとばしり出しました。犠牲なし、値なしに命の食物と命の水を頂いた40年の中で、神が神であられ、全知全能の神がこの私を愛し、尊いものとして下さることを、神の民は味わい知りました。聖書は、口から入る食べ物を軽視してはいません。しかし、どれほど満腹しても、なお一つを欠くなら、その食事は無駄であり、その人生が空しいことを、聖書は明らかにします。聖書は、神が与えて下さる今日のパンを食べて生きたらよい、そう私たちを招きます。そのために必要なことはたった一つ、神への信頼です。この私の身と魂を生かして下さるお方は、主イエスをも十字架で与え尽くして下さった神の他にない、この信仰だけが私たちに求められているのです。

先週水曜の未明、私の父が静かに息を引き取りました。95年の生涯のうち、60年を伝道者として用いられる人生を送った一人の信仰者でした。ここ数年、聖歌610番の3節を、繰り返して口にししました。「最期(さいご)の息を引き取るときも 汝(な)が声を聞かまほし 常世の朝覚むるときには 共に歌わんみ栄えを そば近くおらせたまえや そば近くとこしえに」。最後の息を引き取る時、私たちは「子よ、帰れ」と神に呼ばれて眠りにつきます。神によって一人一人名を呼ばれ、やがてキリストの血に洗われた白い衣を着てみ前に立つ。これが聖書の約束です。

神の確かな救いの約束を信じて生きる人生に、恐れはありません。神が生きておられ、真実であるので、神を信じてその糧を得て生きる者は、確かな希望をもって地上を旅し、旅を終えて眠ることができます。私たちの日ごとの食物を今日もお与え下さい。こう祈れと教えて下さった主イエスは、この祈りの実現に必要なことを全てなし終えて下さいました。私たちに永遠の命を与えて下さるためだけに、主イエスは十字架にかけられ、死ぬまで十字架にとどまり、あらゆる苦しみと絶望とを味わい尽くして下さいました。神が与えて下さる日ごとの食物、なくてはならぬ命を私たちが受け取って神をほめたたえて生きることができるよう。主イエスが教えて下さった祈りは、私たちに主イエスご自身に、神の国に固く結びつける祈りです。今日も日ごとの糧を与えて下さいと祈りながら、私たちに与えられた糧が永遠の命であることを、繰り返し思い起こして祈り続けたいと願います。

(記 説教要約奉仕者)